

## 宮崎県北郷町郷原神社の神楽とその音楽①

黒木 亜美子

### The Kagura and its Music of Gohnoharu Shrine in Kitagō Town, Miyazaki Prefecture ①

Amiko KUROKI

#### 1. はじめに

筆者は、これまで宮崎市を中心に、“春の作祈禱神楽”について報告してきた。今回は、同様の神楽として分類されている、北郷町の神楽について報告する。紙面の都合上、1回だけでは全てを伝えるのは無理のようなので、舞とその音楽について主に書きたいと思う。

#### 2. 北郷町郷原神社について

宮崎県南那珂郡北郷町の郷之原地区ゴウノハルにあり、主祭神は大山祇神オオヤマツミノカミとされている。日向地誌によると、活津彦根命も祭られており、旧村内の13座を遷座して合祀して今に至るといふ。

本来は、神楽は4月に行われ、6月に田植えをしていたとのことであるが、現在は、2月の初めの日曜日に奉納されている。11月15日の例祭には、門外不出の獅子舞いが奉納され、神輿が練り歩く。宝暦4年(1754)の鳥居造築の棟札が残っており、鶴戸神宮と関わりのある松田家が宮司を勤めている。平成13年は、2月4日に神楽が奉納されたが、雨天であったため、社殿内で行われ、この報告は、その時のものである。

#### 3. 郷原神社の神楽について

山口保明によると<sup>1)</sup>、日南地方の神楽として、分類されているが、筆者は同地域の神楽は他に一カ所しか見ていないので、これからいろいろと調査が必要なのだが、“同じ春の作祈禱神楽だから宮崎市のもとの共通点が多いであろう”という考えは、見事に覆されたといつて良い。確かに、修験の影響がうかがえ、「田の神」に相当する「直面」チヨクメンをはじめ、豊作祈願の演目があるが、山口の指摘するとおり、漁・獵祈禱の神楽でもあったようである。

しかしながら筆者は、故池田純義<sup>2)</sup>が指摘したように、陰陽道や吉田神道の影響があり、さらには、高知県のいざなぎ流ご祈禱神楽等とも関連があり、宮崎県における神楽伝播における一つの問題提示となるのではないかと考える。

更には、松田宮司曰く、“この神楽は反閤<sup>ヘンバヤ</sup>を踏まない”との言の如く、独特の舞ぶりがあり、例えば、吉川周平が指摘している<sup>(注3)</sup>“始めは神がかり状態でじゃらじゃらと体の震えに合わせて鈴を鳴らし、後に規則的にざくざくと鈴の鳴らし方が変化する”ということがない。

また、松永建が音楽面で指摘してきた<sup>(注4)</sup>，“ライトモチーフ型”の音楽構造もみられない。細かい分析は次の機会に譲るが、極めて特異な神楽といえるのではないだろうか。

#### 4. 郷原神社の神楽の舞と音楽

それでは、今回はひとまず、郷原神社の神楽の平成13年の奉納順に従って、舞と音楽の説明をしていきたい。



ホウシャマイ  
[奉仕者舞]



(写真1：奉仕者舞)

直面<sup>ヒタマン</sup><sup>(注5)</sup>の4人舞。毛箆を被り、水色と藤色の素襖を着け、右手に鈴、左手に扇を持つ。流し打ちの太鼓の間に4人が正面向きから立ち上がり、ついで内側に縦二人相對して鈴をひと振りし、次に正面向かって右側に向き同じ所作をした後、正面を向いて扇を広げて両腕を後ろから前へ振り上げて体を斜めに倒しながら鈴を振る。体を起こしてもう一度鈴を振り、今度は向かって右側・後方と行い、中央に相對してもう一度行った後、座って扇をたたむ。立ち上がり、4人が全員右向きから正面に向き直り、体の向きを左右に変えて後退しながら鈴を鳴らす。同

じく右側に向いて鈴を鳴らしながら下がって、各々時計回りに右を向いて一旦逆回りをし、左方向から4人全員で祭場を時計回りに回る。この時から太鼓は、流し打ちから基本型に変わる。(「三箆」の楽譜参照)一巡したら、再び半回転し、正面に閉じた扇を向けて伸び上がる動作をした後、また祭場を時計回りに巡り、正面に向かったら両腕を広げ、一步前進し、次に大きく一步ずつ体の向きを右・左と変えながら鈴を鳴らしつつ後退する。二歩ほど後退したらまた両腕を広げ、眼前に出しつつ一步前進する。次に、正面向かって左側に体を向けて腰を落としながら後退し、また前進・後退するのを繰り返す。その後、正面から外側を向きながら座り(片膝立ち)、立ち上がりながら内側に体を向けつつ座り、左袖を巻いて立ち上がり、時計方向に祭場を巡る。一巡したところで、㊦大きく左足を踏み出してその場回りの動作をしつつ、右足を後方に蹴上げ、その足から逆時計回りに祭場を巡り、一巡したら手を引き付けながら逆方向に足を踏み出し、また右足を蹴り上げて時計方向に巡る。一巡して、再び左足を蹴上げる動作に入る。ただしこの時は、体を半分のみ回して4人とも中央に踏み出して向かい合わせ、次に外側に引きつつ右足を後ろに蹴り上げる。再び逆時計回りに巡り始め、一巡後、大きく外側に右足を踏み出しつつ袖を戻して半回転し、また右足を後方に蹴上げてから時計方向に巡る。また一巡した後、回転して全員が体の向きを外側に変え、胸をはって両腕を斜め下に向けながら両袖を後ろに巻き、それをまた前に戻しながら体の向きを全員内側に向くように変えた時に、右足を後ろに蹴り上げる。再びその足で踏み出して逆時計方向に巡

る。一巡したところで、右足を踏み出しながら大きく袖を翻して右手の鈴を鳴らして片膝立ち、次に立ち上がりながら左足を一步踏み出しつつ閉じた扇を持った左袖を翻しつつ90度方向を変えて片膝立ちになり、左袖を巻いて中腰のままその場で反時計回りをして90度回り、片膝立ちで袖を回しながら反時計回りにその場で回って袖を戻す。再び反時計回りに360度回転し、正面向かって右側に全員向いたところで体の向きを変え、前二人と後ろ二人が向き合って歩み寄る。輪を小さくしてから再び4人で反時計回りに巡り始め、㉗以降と同じ所作を繰り返す。この間の太鼓は基本型の  を繰り返し、(「御酒上げ」楽譜参照) 笛も「御酒上げ」とほぼ同じである。前半終了時の太鼓は再び流し打ちになり、舞人も正面を向いて鈴を掲げてジャラジャラ鳴らしながら、一旦前進して後退し、前半を終了する。続けて扇を開いて後半部に入り、太鼓のリズムパターンが基本型の  に変わる。4人が一旦全員正面を向いてから片足内側に扇を引き寄せながら後退した後、両腕を開きぎみにしながら時計回りに回る。この時、扇は要ではなく縁の方を持って舞う。一回りして正面を向き、両腕を開きながら胸をはり、袖を翻しながら腕を上から下に下ろしつつ大きく前進した後、体を左・右・左に向けながら扇と鈴を手前に引きつつ後退する。次に両腕と腰を落としながら右膝立ちに前進し、扇を持った手をひらつかせながら後方に立ち上がる。しかる後に大きく右足を上げて時計回り方向に踏み出して一巡りする。次に全員が正面向かって右側に向いてから同じ所作を繰り返す。これを後正面に向かっても繰り返す。その後、中央縦に相對して大きく腕を回しながら一列に背中合わせで歩み寄り、再び体を左右に開きながら下がって行き、中央縦に相對する位置に戻る。それから大きく右足を踏み出しながら腰を落とし、片膝立ちの姿勢から後進しながら立ち上がり、大きく右足を踏み出して扇をひらめかせながら時計回りに巡る。一巡して左袖を回しながら中央相對し、鈴と扇を手元に引き寄せながら後退し、右足を大きく踏み出して反時計回りに巡る。半周して今度は扇を突き出しながら左足で大きく中央に踏み出し、左袖を振り上げ回しながら中央で時計回りに回転し、右足を交代させながら中央から外側に退く。次に大きく右足を蹴上げながら反時計回りに巡る。半周した所で少し飛び上がるようにしながら腰を落とし、㉘立ち上がりながら左袖を翻しつつ左足を踏み出しながら正面に向かって左片膝立ちとなり、左袖を回す。その後、立ち上がりながらその場で反時計回りしつつ、正面向かって右を向いたら再び片膝立ちの姿勢で左袖を回す。再び立ち上がって腕を交互に回しながらその場で体を反時計回りさせ、一回転したら今後は逆回りをする。正面向かって右側に向いたら、扇を高くかざしながら袖を元に戻す。両腕を上げたまま一回転半し、正面向かって左側に向いたら右足を大きく踏み出し、左袖を翻しながら半時計回りに巡る。一巡したら鈴を鳴らしつつ大きく右足を踏み出し、4人が中央に寄って、また離れながら右足を後ろに蹴り上げて、時計回りに巡る。半周した所で、再び鈴を持ち上げながら中央に寄り、また同じように巡る。合計4回この動作を繰り返した後、時計回りに一巡し、今度は扇を持った手側で中央に寄って離れる。2回目に外側に離れる際に扇側の袖を大きく翻し、反時計回りとなる。㉙3回目で飛び上がるようにして正面を向いて片膝立ちに座し、㉘と同じ所作をする。その後、全員正面向かって左側を向いた時に扇を下しながら反時計回りに祭場を巡り始める。一巡後、今度は扇と鈴の両方を捧げ持って中央に寄って離れて反時計回り、を4回繰り返す。反時計回りに一巡した後、また扇を差し出しながら中央に寄って離れて反時計回りの所作をするが、これまでと違い、2回目に中央寄りから外側に離れる際に、扇を持った手を上に、袖を翻しながら体を反時計回りに回して離れている。この後、㉚㉛の所作に続き、今度は正面向かって右側

に向いたら扇を持った袖を振り上げ、ついで鈴も頭上にかざして反時計回りにその場で回り、正面を向いた所で腕を下げ、鈴を鳴らして両腕を開き、前進しながら鈴と扇を眼前に捧げ、手元に引き寄せながら後退して腰を落とし、また鈴と扇を目の高さに持ちながら正座して鈴を鳴らし、拝礼して終わる。

この間の囃子は、太鼓は「三笠」の基本パターンで、笛は「御酒上げ」の基本パターンが用いられており、扇を高く揚げた時のみ鈴がジャラジャラと鳴らされ、太鼓は流し打ちになる。始めと終わりのパターンは「御酒上げ」と同型である。

〔三 笠〕 No. 1

注) ① (舞い始め)

笛

太鼓流し打ち

②

③ 64

笛

太鼓 銅拍子

④ 太鼓流し打ち

⑤

笛

太鼓 銅拍子

⑥ 太鼓流し打ち

⑦

笛

太鼓 銅拍子

⑧ 42

太鼓 銅拍子

(太鼓基本パターン)=六調子

注) 笛の実音は9度上である。

[三 笠] No.2

太鼓は基本パターン  
(出だし)

⑧

⑨

⑨'

⑩

⑪

⑫

⑬

⑬'

→⑫→

→⑧→

→太鼓流し打ち

rit. (太鼓も同時に)

(終了部)

笛

太鼓  
銅拍子

ヨスイア  
〔御酒上げ〕 No. 1

注)

(舞い始め)

笛

太鼓  
銅拍子

笛

太鼓  
銅拍子

● = 86 (舞い前半)

太鼓  
銅拍子

舞の区切り部  
(打楽器のみ)

笛

太鼓  
銅拍子

(舞いの入りのパターン)

笛

太鼓  
銅拍子

笛

太鼓  
銅拍子

注) 笛の実音は9度上である。テンポは伸び縮みして、平均♩=72ぐらいである。  
実際の笛のリズムと太鼓のリズムとの間には微妙なズレがある。

ヨスイア  
〔御酒上げ〕 No. 2

基本パターン ① ② ③ ④ ③  
① ② ③' ④' ③ ④

⑤(舞の終了部)

①②⑤神歌⑥神歌①②⑥  
↓  
(太)は ♪  
足踏み(右足でタン!と床を打つ)

(神歌の後)

ゴスイア  
〔御酒上げ〕 No. 3

♩=82  
注) (神勧請のパターン)  
2回  
||:⑦勧請:|| (⑧勧請:||  
⑧'  
アマテラスメオオカミ

⑦

⑧

⑧'

(舞いの後半) ①2回(ただしリズムは⑨のリズム)⑨③' ⑨③①⑤⑩

⑨

注) 打楽器と笛は便宜上、縦線で仕切るが、必ずしも拍通りの演奏ではない



## [鬼神]

着面の一人舞。陣羽織に大口袴のいわゆる鬼神装束で、面の下に手拭いを巻いている。毛頭に冠をつけ、左手に鬼神棒、右手に扇を持つが、扇は後半に使う。

この舞は、宮崎市近辺の鬼神と共通するところが多いので、詳しい説明は省略する。

重要なのは、松田宮司が言ったように“反閤”をふまないことと、かなり頻繁にはっきりと“面切り”の動作をすることである。また、全体がこの神楽の基本となる“六調子”と言われるリズムに基づいていることである。神歌があり、霧島信仰がうかがえる。

## [鬼神]

注) ● 104(基本パターン)

笛のつなぎパターン

①

②

※基本パターンを繰り返しながら①②が時々入ってくる。

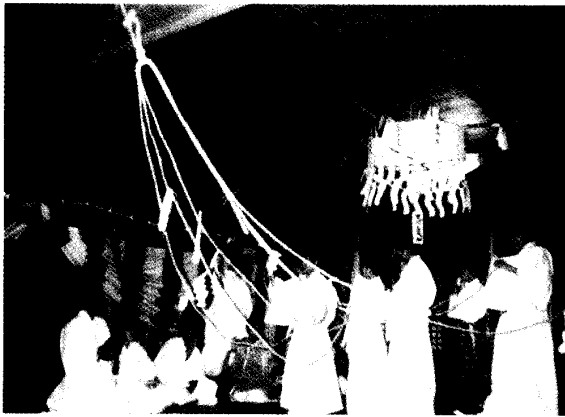
● 84 [みどり(箕取り)] (嫁女)…笛はついていない

(基本のパターン)

(後転のパターン)

注) 笛の実音は9度上である。

ク  
オロ  
[繰り下し]



(写真2：繰りおろし)

直面、白の神官装束の6人舞。祭場中央にまとめであった注連縄（扇や御幣、日・月を表すらしい丸い飾り物が下がっている。）6本を各々1本ずつ持って後方正面から正面に向かって縄を揺らしながら2回前後する。その後、一列に並び、縄の端を右手で横一列に持ってくるくる回しながら一礼するのを、右左2回ずつ繰り返す。2回目は座って深く一礼する。立ち上がって今度は正面向かって右側と左側で同じ所作をする。今度は左右2列3人ずつに分かれ、正面を向いて同じことをし、次に後方に前後3人ずつに並ぶ。これから後は太鼓が拍節的なリズムを刻み始め、前の3人が4ステップずつ右・左・右と細

かく縄の端を回しながら跳びつつ正面に座り、座ったままで左右に跳び、後方を向いて再び3ステップで戻る。次に別の一列が出てきて、同様にする。また元の一列が同じ所作をし、交代した一列が同じことをするが、前進の際には縄を手繰っていき、後進で再び縄を伸ばす。次に縄を揺らしながら前進し、しばらく正面で縄を揺らしている。そのまま縄を落とし、舞の前半は終わる。縄は再びまとめられて正面に吊される。太鼓が流し打ちをしている間に次の舞の用意がされ、採り物として鈴と扇が用意される。

再び6人が正面に向かって2列で座し、扇を開く。立ち上がると、太鼓のパターンが変わり、ややテンポが早くなる。左手に扇、右手に鈴を鳴らし、時計回りに祭場を巡った後、扇を外側から中央に大きく動かし、逆回りに巡り始める。これを2回繰り返して縦2列になったら、鈴と扇を交互に前に出しながら片膝立ちを繰り返す。扇をかざしながら外側に体を回しつつ中腰で一回転して正面を向くと、扇で顔を隠すようにしながら立ち上がり、再び体を回し、縦一列で互いに中央を向いたところで扇と鈴を顔の横に掲げ、また一回転する。扇を回しながら二列のままで全員正面向かって右側を向き、扇で横顔を隠すようにし、鈴を鳴らしつつ一回転し、正面を向いたら扇と鈴を腰のあたりで前方に向けて前進し、鈴を鳴らし、次に後退して腰を落とし、鈴と扇を胸の両側に捧げ持ったまま正座して拝礼、鈴を一回鳴らして終了する。

〔繰り下し〕

注)

(綱使いの部分)

太鼓は流し打ち

(舞いの部分)始めの部

笛…太鼓と銅拍子は上記と同じ

※舞いの本体部分は上記太鼓リズムに、笛は〔御酒上げ〕と〔三笠〕の組み合わせ

♩ = 78 (前半舞いの終了部)

♩ = 96 後半=扇舞は太鼓が変わる。笛は〔御酒上げ〕のパターンと同じ

(舞い納め)

注) 笛の実音は9度上である。

## [鯛釣り舞]



(写真3：鯛釣り舞)

油津神社のものを真似た比較的新しい舞で、本来は一人舞であるという。今回は少年4人による舞であった。白装束で、釣竿に鯛の作り物を糸で下げた採り物を右肩に、左手に閉じた扇を持って、正面正座・拝礼の後、立ち上がって時計回りに祭場を巡る。一巡り後、膝を曲げて一回転し、今度は反対方向に巡る。次にまた膝を曲げて方向転換し、閉じたままの扇を前に突き出して正面に対して縦二列に相對して中央で交差して位置を変わり、もう一度交差する。その後、また膝を曲げて一回転し、祭場を巡る。今回は横一列となって交差する。再び祭場を巡り、その後閉じた扇を額にかざして何かを探すような仕草をする。その後、首を右・左・右とかしげ、しばらく立ち止まってから4人で唱行を唱え、全員正面に向かって縦2列に内側を向いて座り、釣りの仕草をする。鯛が3回釣れた様子を表し、この間太鼓はずっと流し打ちである。再び前半と同じ舞の後、唱行を唱え、釣りの所作に入るが、今度は前二人、後二人で背中合わせで座り、外側に向けて釣り糸を垂らす。もう一度立ち上がって祭場を巡り、全員内側を向いたら、掛け声をかけながら釣竿を中央に突き上げ、戻したら90度時計回りに巡り、また同じ所作をする。これを4回繰り返す。つぎは反時計回りに同じことを繰り返す。それが終わると、全員正面に正座して拝礼して終わる。

## [三笠]



(写真4：三笠)

6人舞。2名ずつ赤・藤色・水色の素襖を着用し、竹と和紙で作った笠を被り、鈴と扇を採り物とする。太鼓の流し打ちの間、3人ずつ二列に正面を向いて座し、正面に拝礼し、閉じた扇を眼前で振る。(楽譜①) 楽譜②で二列に向かい合い、楽譜③で閉じた扇を両手に横に持ち、「田植え」の動作をする。④でつないで、⑤では扇を立てて同じ動作を行う。⑥をはさんで⑦では扇を開いて同じく「田植え」の動作をする。太鼓の流し打ちで立ち上がって6人共に時計回りに回り、(出だし) から⑧⑨⑨'の囃子を使い、⑩で二直列内側向きに對面して袖を巻き、足を一步上げる所作をする。⑪で交差して、⑫で同じ所作をする。再び時計方向に回り、⑧⑨⑫の囃子を用いた後、⑬でその場で体を回し、また交差して位置を変え、⑬'で直線隊形に戻り、袖を回し、⑫から⑬'後半に続き、⑭で元の位置に正面を向いて座り、rit. しながら拝礼し、終了部に続く。

〔鯛釣り舞〕

注)

72

笛

太鼓  
銅拍子

以下太鼓と銅拍子は同じリズムを繰り返す。

笛

3

(釣りの部分)太鼓と銅拍子は流し打ち

太 accel.

太 a tempo

太 accel.

太 accel.

(舞いに戻る)

注) 笛は実際は9度上の音  
×印は太鼓打ち止め

〔鉦 舞〕

♩ = 108 (入り)

太鼓  
銅拍子

注1) (舞いの囃子の基本) ♩ = 92 注2)

笛

太鼓  
銅拍子

注3)

笛

(終了部)

(鉦舞終了部) ♩ = 78

- 注1) 笛は実音は9度上
- 注2) 扇舞になると ♩ = 110ぐらいにテンポアップする
- 注3) 場合によって上段のものと下段のものと使い分けする

〔直 面〕 No. 1

注)

①

笛

太鼓  
銅拍子

②

笛

太鼓  
銅拍子

③

笛

太鼓  
銅拍子

④

笛

太鼓  
銅拍子

⑤

笛

太鼓  
銅拍子

(太鼓と銅拍子は同じパターン ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ を繰り返す)

⑤'

笛

~ ♪ のパターンを入れ替えながら  
組み合わせて最終部分へ

注) 笛の実音は9度上である。

[直 面] No.2

(最終部分)

⑥

笛

太鼓  
銅拍子

⑦

笛

太鼓  
銅拍子

⑧

笛

太鼓  
銅拍子

⑨

笛

太鼓  
銅拍子

後は〔繰り下し〕終了部後半に同じ

(太鼓だけの部分)

accel.

[笛の音階の実音]

8Oct.

(民謡のテトラコルド)



ユスイア  
[御酒上げ]



(写真5：御酒上げ)

「三笠」の舞人が一人残り、そのままの装束で舞う。水色の素襖を着用した舞手が右手に鈴、左手に白い御幣2本を交差させて持つ。祭場後方より鈴を打ち鳴らしながら御幣を正面にかざし、左足を高く一步上げて前進した後、後進して戻るが、その際、体を左右に向けながら腰を落として上体を曲げながら腕を上方に上げて動く。下がりきったところで上体を起こして開き、そのまま小回りに正面から見て時計方向に回る。定位置（正面後方）に戻ったところで一旦腰を落として体を引き、しかる後に再び時計方向へ大きく回り、正面で右足を軸に体の向きを

正面に向け、左足をぐっと踏み出しながら体を落とした後、一旦伸び上がり、再び体を落として進行方向に体を向けて残り半周を舞う。回り始めた時から囃子は基本パターン（六調子）となり、また、鈴は縦方向に舞の動作の一区切り毎にしっかりザクザクと鳴らす。定位置（後正面）からキンカイ（衣笠と表現される、祭場中央天井より吊される円形の飾りで、五穀の種が吊されている）の真下まで手を大きく上げ、伸び上がって前進、腰を落として後進し、その間大きく体を左右に向けながら後進の時に鈴を鳴らす。この動作の3回目の前進から正面向かって左側に体を回転させて座って膝をつき、大きく伸び上がりながら御幣側の手を振りつつ右足を後とした片膝つきの座位で正面向かって左側に向き直り、御幣を振り上げながら立ち上がる。その後、跳ぶようなステップで左側に御幣側の袖を振り、ここで体の向きを変えるが、その時に片足を後方に蹴上げている。それから反時計回りに舞始め、定位置に正面に背中を向けた形から、前と同じように伸び上がりながら体の向きを変え始め体を落としたところで再び時計回りに舞い歩み始める。定位置で鈴を鳴らして袖を巻いて足を大きく上げる動作を区切りとして、時計回り、反時計回りを2回繰り返す。ここで正面を向いたらひざまずき、そのまま袖を翻しつつ2歩前進する。袖を巻きながら体を起こしつつ中腰で一回転し、正面を向いたら片膝立ちしながら再び体の向きを一回転して正面に戻した時には立ち上がっている。再び反時計回りして正面を向いて袖を回して立ち、後方に下がって今度は反時計回りに舞い始める。合計3回、反時計・時計回りを繰り返す。3度目に定位置にきたところで正面を向いて腰を落とし、座って伸び上がりながら左右の足を変えて前進し、袖を巻きつつ一回転して立ち上がり、正面から左を向き足をタン！と2回鳴らした後、再び時計方向に左右1回回り舞う。この足を鳴らす時は、笛も太鼓も楽譜⑤の前半2小節が使われる。その後は舞も囃子も通常の3回ずつ舞う基本パターンに戻る。基本を1回繰り返した後、囃子は⑤に変わり、舞も顔を伏せて腰をまげた状態で鈴を鳴らしながら小走りに正面に行き伸び上がり戻り、また足をタン！と2度踏む。また時計回りの基本舞を行い、今度は2度目の反時計回りで正面に来た時、反時計方向に進みつつ腰を下げ、後方に移動し、正面向かって後方左手隅から正面左端対角線方向に体と御幣を向けて足を踏む。再び回り始め、足を踏むまで同じ動作を繰り返す。足を踏む動作の間、囃子はいずれも楽譜⑤である。この後、神歌を同じ場所で歌い（その間無伴奏）、太鼓が流し打ちに入り、⑥の囃子と共に回り舞の繰り返すので、腰を落として行って途中で小さな円を描く速い舞い方に変わり、定位

置で正面に向かって止まって神歌の後半を歌う。この時、既に正面に神主が御幣を持って立っている。一回り舞った後で囃子が⑦に変わり、舞ぶりも変わる。即ち、3歩ずつ片足を上げて跳び進む独特な舞となる。この時、体も腕も進行方向に左右に大きく伸ばしながら、右足3歩4歩目休み、左足3歩、4歩目休み、というように、見方によっては西洋のダンス的な要素のような動きをする。これで祭場を一周舞う毎に神主の前で頭を下げて神勸請を行うのである。勸請される神々の順番は次の通りで、舞の部分は⑦⑧の囃子が入る。天御中主神、天照皇大神、郷原神社、住吉神社の神、大年の神、御年の神、天つ神、国つ神、八百万の神、と、神勸請が全て終わったところで“六調子”と呼ばれる基本型の太鼓に戻り、楽譜⑨以降の囃子となる。舞の方は、通常の舞に戻り、前半の基本舞と同じパターンに戻る。即ち、時計回り、反時計回りに歩み舞った後、(後方定位置で必ず正面を向いて鈴を鳴らす)定位置にて正面に向いて膝行で袖を回しながら左右に体の向きを変えつつ2歩前進、立ち上がりつつ一回転して再び片膝立ちとなり、両袖を回し、立ち上がりながら体を回して時計回り、反時計回りをし、正面に袖を巻きつつ御幣を捧げ、そのまま鈴を鳴らしながら一回転する。腰を落とした後に右足を後方に振り上げ、時計回りに舞始める。時計回り→反時計回りを1回行い、その区切り(後方定位置)では、片足を後ろに蹴り上げる。この動作は、ここの神楽の特徴の一つであろう。(通常は神前では足の裏を見せない、と言われているが、山間部の例えば米良神楽等には見られるものである。)この後、後方定位置に来た時、右足を大きく一歩踏み出して正面に向かって両手を伸び上げる(捧げる)ような所作をしつつ、手を後方に引き戻し、右足を蹴り上げる。時計方向に回りながら座の位置が変わる度にこれを行い、1周と4分の1回ったところでこの所作を行った後、反時計方向に回り始める。半周(正面向かって右側)したところで、左足を大きく踏み出してキンカイの下で袖を振り上げながら一回転して元の座に戻る。再び反時計方向に回り始め、後方定位置に来たら、大きく右足を踏み出しながら右手を前に顔を伏せて座り、(片膝立ち)立ち上がりながら反対側の足で同じ動作を繰り返す。袖を巻きながら反時計方向に回り、再び袖を巻きながら今度は回り立ちし、袖を翻しながら反時計方向に回り、正面を向いて御幣をかざす。そのままの姿勢で鈴を打ち鳴らしながら反時計方向に回り、正面を向いて両手を広げ、前進しながら手を正面に持っていく。両手を開き前進しつつしゃがんでいき、正座して舞い終わる。正面を向いて御幣をかざした所で、囃子は⑤⑥⑩で終わる。この舞が終わると酒を飲んでも良い、とされていた、とのことである。

なお、神歌は自然に上下して音階ができていたと言いがたいが、完全4度間隔の音の開きが存在している。

### [御神体]

高千穂神楽から取り入れた演目とのことであるので、省略させてもらう。

### [みどり(嫁女)]

直面の三人舞。たっつき袴に袖の短い白の上衣と頬被りの男性の舞手2名が各々1本の杵を持ち、女装(嫁女姿)の舞手1名が、箕を取って舞う。この舞には笛がついていない。始めに男性姿の舞手が杵を頭上で回しながら舞う。次に嫁女が箕を持って同様に舞う。この間太鼓と銅拍子は“基本パターン”を奏し続ける。次に男性の舞手が杵を男根に見立てて後転するが、その間太鼓は“後転

のパターン”を奏する。“基本パターン”に戻ったら舞手は祭場を一巡りする。もう一人の男性も同じことをし、その後、嫁女が箕を使って同じような所作をする。次に、三人一緒に各々の採り物を持って真ん中に嫁女をはさみ、いわゆる“岩潜り”の所作を行った後、男二人の肩に渡した杵に嫁女が上って立ち上がる。この間の太鼓は、“後転のパターン”から“基本のパターン”に移る。このパターンの移行を繰り返しながら、舞手たちは増殖儀礼を表すやや卑猥な動作をし、太鼓は“後転”のパターンに移り、最後に箕の中の餅（せんぐ）を撒いて終了する。この舞は、宮崎市の神楽にあるものと殆ど同じである。

### チヨクメン [直 面]

着面の一人舞。これも宮崎市の神楽で“田の神”とされている演目によく似ている。

赤い上着に赤い袋を腰に下げ、模様入りのたっつき袴を着け、ピンクの腰紐を巻く。鉢巻きの上に面をつけ、毛頭を被る。面は黒の翁様のもので、眉、髭が上下植毛してある。最初、右手に鬼神棒、左手に鈴を持つが、途中、和紙と竹で作ったすり鉢（黄色い縁飾りがある）とすりこぎ（これにも黄色い飾りがある）を持って舞い、その後鈴を振って舞った後、観客にかまどの煤をつけて回る。

最初の3小節分の囃子（楽譜①参照）で登場の後、正面を向いて「この所良き所」と言った後、裏声で「ホーイ」と言いながら鈴を振りつつ立ったり座ったりしながら一回転半する。その後、囃子は後へと続き、舞手は片足を上げながら2歩ずつ進み、祭場を巡る。太鼓だけの部分でかけ足になり、楽譜③に入った後囃子が止むと、正面向かって左側に両手を突き出し鈴を振りつつ、大きく手を上から腰に回す。一礼して、「まず本日はこのところ～」と唱行を唱え、国家安泰、武運長久を祈る。再び③以外の囃子となるが、今度は直立したまま歩き、正面向かって右側で同じように両手を突き出して鈴を振り、腕を大きく上方から側面に下していき、腰の位置に構える。囃子は⑤⑤' ⑦⑨を繰り返す、正面で舞手が同じ動作の後しゃがみ、そのまま首を左右にかしげ、肩に採り物（鬼神棒？）を担いだ後、鈴を鳴らして立ち上がり、正面から後方に向かい、前と同じように2歩ずつ時計回りに回る。後正面に位置したら、囃子は⑨に変わり、座りながら片足ずつ、各々鈴と鬼神棒を突き出しながら前進する。キンカイの下に来たら正座し、すりこぎとすり棒に持ち替える。その間囃子は止まっているが、「ホッホッホッホッホー」と言って座りながら採り物を捧げ上げてその場を回る時、太鼓のみ流し打ちをする。その後、また囃子が止まり、「ホーッ」と言ってすり鉢とすりこぎで陰陽のことを説き、（舞始め；楽譜[三笠]参照）



(写真6：鉢舞)



(写真7：直面)

キンカサの下で「ホーッ」と言いながら座り回りした後、採り物を高く掲げ、それを下に降ろして持ち、前進しつつだんだん持ち上げていって、正面ですりこぎですり鉢をつき破り、高く掲げたら下方に降ろし、後は⑥以降の囃子で、つき破られたままのすり鉢を両手で持って、前半と同じように祭場を巡る。次に⑨の囃子ですりこぎとすり鉢を分離させてみせて、採り物を前に置き、後正面で正面に向いて正座する。囃子が止まり、今度は鈴とめしげに持ち替え、「ホッホッホー」と言いつつ立ち上がり鈴を振りながら一回転する間に⑥以降の囃子が始まり、最初と同様に舞った後、めしげを包んでいた白い紙を破り捨て、観客の方に、めしげについた“かまどの煤”をつけて回りに行く。必ず顔に塗るので、泣き出す子供もいる。この間ずっと囃子は同じである。ひとしきりつけ終わると、もとの舞で一巡した後、⑨の囃子に入り、キンカイの下で3回片膝をつきながら正座し、一礼して終わる。退場する時は採り物を置いたまま、腰を曲げた姿勢で引っ込むが、この時囃子は〔三笠〕の（終了部）のパターンを奏し続ける。



(写真8：鉾舞の面)



(写真9：直面の面)

タチカウ  
[手力男]

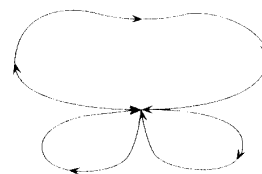


(写真10：手力男)

祭場中央の少し前方に木の箱が置かれ、手力男命の面と採り物等が置いてある。舞手は青の素襖と大口袴を着用する。舞手が箱の前で身仕度を始めると、奏楽が始まる。(楽譜①) 鉢巻きを巻いた上に赤い鬼神面を着け、毛頭と冠を被る。腰の後ろに白の御幣を2本交差させて差しているが、同様の御幣2本を交差させて左手に持ち、右手に鈴を持つ。後方正面の定位置について舞始めると、囃子は②から③の繰り返しに移る。鈴を振って腰を落として面切りをし、その後両手を大きく上下させつつ、片足ずつ大きく足を上げて跳び、回転しつつ腰を落とす動作を繰り返しながら祭場の後ろ半分を時計回りに巡り、

後方定位置に正面を向いて戻ると、囃子のリズムに合わせてその場で足踏みしながら、採り物を前方で上下に振り、それが終わって太鼓が流し打ちになると、(楽譜④) 鈴をジャラジャラ鳴らしながら右左に大きく動き、右→下→左、左→下→右と、前屈しながら採り物を動かす。それが済むと、採り物を上方に掲げ、鈴をジャラジャラさせながら反時計回りに祭場を巡って定位置にくると、囃子が止まり、天岩戸開きに関する神歌を歌う。歌い終わりから、また跳んで上下しながら祭場を巡るが、今までと違ってクローバー型のような順で巡る。

その後は前述と同じ動作の繰り返りで、ジャラジャラ鈴が終わって定位置に来る度に神歌を唱える。ひと区切りつくと、囃子が⑤に変わり、舞手は中央に座る。素襖を脱いで、いわゆる鬼神装束となり、採り物を持ち替えている間に、天照皇大神が控えの間から出てきて、正面に宮司と二人、拝殿入口方向に向かって並び立つ。天照皇大神は女面、女装束で、はじめ日の丸の扇で顔を隠している。⑥以降の囃子に変わり、手力男命は持ち替えた鬼神棒を腰の前で水平に構えて両手で回しながら祭場を巡る。⑦の囃子のパターンで、後方正面から前方に向かって鬼神棒をつきながら片膝ずつ前進し、キンカイの下に鬼神棒を置くと、閉じた扇を持って天照大皇大神の前に歩み寄る。扇を開いて捧げ持ち、神歌を歌った後、扇を閉じて跪いて「あなたぬし、あなたさよ、あさ、おきおきよ」と唱えて拝礼して引つ込む。天照皇大神は、その場で宮司に手を添えられながら一回りし、(その間の囃子は〔三笠〕の終了部と同じ) 扇を普通に構えて一人で退場していく。



大体このような形

以上で、神楽の奉納を終わるが、〔鉦舞〕の本来の位置は、〔みどり〕の後であるという。この他、子供たちの舞を入れる為に、若干の変更は度々行われる、とのことである。鉦舞については唱行が長いので今回は省略させていただくが、非常に珍しい舞いぶりである。

### 〔手力男〕 No. 1

注)

①

②

③

④

笛⑦のvariante

笛⑧のvariante

注) 笛は実音は9度上である

〔手力男〕 No. 2

注)  $\bullet = 66$

⑤

笛

太鼓  
銅拍子

(天照皇大神出現)

⑥

笛

太鼓  
銅拍子

笛

太鼓  
銅拍子

笛

太鼓  
銅拍子

⑦

笛

太鼓  
銅拍子

神歌

rit. 神歌終了後 ④のパターンから〔三笠〕の終了パターンで終わる

注) 笛は実音は9度上である。

## 5. 囃子の楽器について

郷原神社の神楽の囃子に使われている楽器は、太鼓、銅拍子、笛各1である。

太鼓は締め太鼓で、神楽で使用されたものでも、外径72cm、胴径55cm、胴長53cmで杉材を使用している、とのことである。現存する最大の太鼓は、くりぬき胴であるそうだ。南那珂地方の太鼓は全て、締め太鼓である、とのことである。桴はすりこぎ状のまっすぐなもので、長さ37cmで直径は2.6cm～3.8cmである。太鼓は締め太鼓の方が古型とされており、その意味では古くからの伝統を重んじておられるようだ。現在の太鼓は、鹿児島県の太鼓店製のもの、とのことである。

笛は地元の竹を使った手作りの篠笛状のもので、全長約40cmほどの7孔の糸巻きしてある笛で、吹口側におもりが入れてある。音は高い方で、(楽譜参照)常に1本使用しない予備のものを置いておくそうだ。宮崎市近辺の神楽の笛は6孔のものが多く、比較・検討する必要があるだろう。

銅拍子については、他所と同型といて良く、奏法については、どちらかというところ擦り合わせるような叩き方が多い。

## 6. 祭場について



(写真11: キンカイまたはキングサ)

冒頭で述べたように、本来は外神楽形式であるので、中央正面に高く注連を立て、上下32本の御幣(32神)を差し、足幣まで注連縄を引く、という。また、東西南北中央に分けて、東=青、西=白、南=赤、北=黒、中央=黄色の御幣をキンカイ(衣笠)につけるのは、明らかに陰陽五行説によるものである。また、キンカイの真ん中に五穀を入れた升を吊し、以前は福種下しをしていた、ということは、農耕儀礼に深く関わるものと思われる。(写真参照)また、祭場の回りには、日本書紀の14柱を墨書して吊す。これらの様子については、外庭で奉納された時の取材を待って再び報告したい。

## 7. 舞ぶりについて

[鉦舞]の舞い方についてお尋ねしたところ、“足を引く”所作は昔から変わらない舞ぶりであり、“面の切れ”“体の切れ”で舞うのであり、舞いに太鼓を合わせるのであるが、なかなか合わせ難い、とのことである。また、腰を落とさず、引っ込む時は飛び出るようにし、反閤を踏まないが、足を動かすようにする、という。

[鉦舞]に限らず、郷原神社の神楽は、全体的に舞の重心が高く、これは、他の、いわゆる「作祈祷神楽」とは異なる点ではないかと考えられる。また、面をかけた神楽では反閤がないようだが、[御酒上げ]で足を鳴らす所作がそれに相当するのではないだろうか。加えて、直面の神楽では頻繁に袖を巻く所作があるが、本来この動きは“魔を払う”ものとされていることを考えると、単純に「作祈祷神楽」とすることにはやや抵抗が感じられる。

## 8. 音楽について

今回は、採譜し得たものについて述べるが、一般に神楽には“六調子”とか、“八調子”等という言葉が普通に使われているが、それは舞の手数の違いを主に表すことが多く、同じ調子の舞はテンポと太鼓はほぼ同じである。

しかしながら、郷原神社の神楽の“六調子”は、基本的リズムパターンであるには違いないが、テンポが異なるものがある。

また、[みどり]のようなアクロバティックな舞は、他所では剣等の武具を使った舞とリズムパターンが同じ場合が多い。だが、その傾向はここには見られない。そもそも剣舞の類が現存していないので、そのようなパターンがあったかどうかは分からないが、かつてはその類の演目があったそうなので、可能性としては（[みどり]に使われたかどうかはともかく）アクロバティックパターンがあったかもしれない。

## 9. おわりに

これまでに触れてこなかったが、神楽面には植毛のものが多く、また、一角の鬼神はあらゆる意味で力の強い神であり、それを[鉾舞]の面として使用してきたことには、伝承の古さが感じられる。

また、郷之原地区は、いわゆる《盆地世界》<sup>7)</sup>を形成してきたと考えられる。郷原神社には室町時代の鏡が伝えられており、伊東家による影響もあったであろうし、海岸部の宮浦地区との交流も以前からあったという。

それらを含むいろいろな観点から考えていくことが必要であろうし、また、他地区との比較・検討を重ねていくことの重要性はいうまでもない。

まだまだ筆者は経験と勉強が不足しており、引き続き研究を続けていきたい、と思っている。紙面の都合と併せて、今回は不十分な報告であったこととお詫びしたい。

また、様々な情報を提供していただき、ご教示いただいた松田治生宮司、本山隆義氏、那須孝吉氏をはじめとする郷之原地区の皆様にご改めてお礼を申し上げます。

## 注

- 1) 山口 保明 2000「宮崎の神楽」鉾脈社
- 2) 池田 純義 「日南地方の神楽歌を中心に」『宮崎県地方史研究紀要』第18号 平成4年(1992), 127～148
- 3) 吉川 周平 1985「民俗芸能の一研究—動きを視点として—」『諸民族の音』: 音楽之友社 p. p. 165—189
- 4) 松永 建 1986「南九州の諸神楽の研究—高千穂・銀鏡・祓川神楽—」『音楽と音楽学』: 音楽之友社 p. p. 619～644
- 5) 能の用語で、面をつけないで舞うこと。
- 6) これも能の用語で、面をつけたまま顔の向きを素早く変えること。
- 7) 武光 誠 2001「県民性の日本地図」文藝春秋社